

世の中はなにか常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

読
人
知
ら
ず

川

- 02 五十鈴川 / お神札のあるくらし / 「復興焼のり」
- 03 一季節のアルバム—「秋から冬」
- 04-05 ワークショップ「重陽の節句」
- 06-07 「ユーカーリースをつくる小さな会」
- 08 一東北だより—「八幡神社例祭」
- 09 小泉川の鮭とお祭り
- 10 二十四節気と日本の風習(四)～立冬から大寒～
- 11 キリシタンの地に行く—大籠村のキリシタン
- 12-13 河童をたずねて目久尻川を歩く。
- 14-15 ～記憶の中の音と像～川
- 16 古今のうた「川」
- 17 本を読む。「川を考える本」
- 18 旅の止まり木・4「川の思い出ふたつ」
- 19 photo レチェ川
- 20 授与品紹介 / 編集後記

あけましておめでとうございいます。



平成28年12月18日撮影

三重県伊勢市を流れる五十鈴川です。

倭姫の命が御裳の裾の汚れを濯いだという

伝説があり「御裳濯川」ともいわれます。伊

勢の内宮（皇大神宮）の西端を流れており、「御手洗場」として、参拝者はこの川の水で

心身を清めてから内宮を参拝します。

お神札のあるくらし

新しいお神札で

新しい年を迎えましょう



日本の家庭では、昔から新年を迎えるにあたり、氏神様をお祀りする神社から毎年新しくお神札を受け、新しい年の家族の幸福を祈ってきました。

また、古いお神札やお守りは今年一年を無事に過ごせたことに感謝し、神社に納めます。神社では、それらの納められたお神札を清浄な火で焼納します。

神棚のないご家庭でも、高い場所に簡易神棚や白い紙を敷くなどしてお祈りすることが出来ます。神棚に手を合わせることで、感謝の気持ちをもつて心穏やかに毎日を過ごすことができるでしょう。

「復興焼のり」

本年も札所にて、宮城県奥松島月浜の海苔生産グループ「月光プロジェクト」の皆さんが作り出した「復興焼のり」を、撤下神饌として頒布いたします。毎年、美味しいと好評をいただいております。ぜひ月浜の海のお召し上がりください。



「月光プロジェクト」ホームページ

<http://www.gekkoh7.jp/>

平成二十八年

秋から冬

七五三詣



今年も七五三詣のお子様やご家族で境内が華やぎました。お子様の健やかな成長を祈願いたしました。

大麻頒布始祭

はんぷはじめ



十二月一日、大麻頒布始祭が行われ、この日より神宮大麻、弥生神社御神札をはじめ各御神札が、総代さんたちにより、また札所にて氏子の方々へと頒布されます。



しめなわ
注連縄奉製の集い

十二月四日、地域内外の方々が参加し、新年に神社の社殿をおおほへを飾る注連縄と大祓で参列者の皆さんとくぐる茅の輪を作りました。作業の後はおでんの会。お互いに労をねぎらい親睦を深めました。神社を支える技術が引き継がれていきますように。



重陽の節句

しゅゆのう

～菊花アレンジと茱萸囊・香り袋づくり～



九月九日は、長寿を祈る「重陽の節句」。「菊の節句」、「栗の節句」ともいわれます。現在では、重陽の節句は他の節句に比べ馴染みのないものですが、昔は重要な節句として様々な行事が行われてきました。弥生神社では、古来の風習を知り味わえるワークショップ「重陽の節句」菊花アレンジと茱萸囊・香り袋づくり」を行いました。

昔の節句の風習を現代風にアレンジしながら、香りと手触りで味わっていただけけるワークショップ。茱萸囊づくりでは、和服の帯を解いた絹布で袋を縫い、中には呉茱萸ごしゅゆの実を入れました。酒井抱一の「五節句図」のうち「重陽宴」に描かれた茱萸囊袋の絵を参考に、形を再現しました。そして、「菊酒」と「被せ綿き」にならって檜の柵に菊花や綿、和紙を使ったアレンジメントを作りました。さらに「菊枕」にちなみ、乾燥した菊花を和紙で包み枕にそっと入れられるような小さな香り袋を作りました。

参加の皆さんは、帯布が縫いにくく苦心されていましたが、お好きな香りを選んだり折り鶴を教え合ったり、菊の花を愛でたりと、ゆつたりとした時間を過ごしていました。

節句当日には香りよく菊酒をいただけるよう、木曾の檜でできた柵。



手づくり和菓子は菊入り最中と栗の節句にちなんで渋皮煮。

呉茱萸は少し癖のある香りです。



茱萸囊袋の中には呉茱萸の実を入れます。

【重陽の節句】

中国の陰陽思想では九が二つ重なることから「重陽」といいます。奇数は縁起がよく、中でも九は最も大きな陽の数なのですが、奇数が重なると気が強すぎ逆に不吉とされました。そのため、お祓いをして長寿を祈る節目の日となったようです。これが転じておめでたい日とされるようになりました。

呉茱萸ごしゅゆ

ミカン科の落葉小高木。初夏、緑白色の小花が集まって咲く。赤い実は漢方薬として用いられる。中国の原産で、享保年間に日本に導入されたゴシユユを、日本ではいつの頃からか「ニセゴシユユ」と呼んでいた。日本には渡来しておらず、中国で「石虎」と呼ばれる実を日本では「ホンゴシユユ」と言い、こちらが本物と信じられてきたようである。なお、現代の『中薬大辞典』や『中華本草』では「ニセゴシユユ」のほうを正条品としている。(小太郎漢方製薬株式会社より)



秋をへて蝶もなめるや菊の露

草の戸や日暮れてくれし菊の酒

綿させて十程若し菊の花

松尾芭蕉

小林一茶



垣根なる菊のきせわた今朝みれば まだき盛り
の花咲きにけり

藤原信実 『新撰六帖』



〔節句の風習〕

【その一 茱萸囊】 茱萸囊とは、吳茱萸の実を緋色の袋

に納めたものです。茱萸囊は、中国の故事にもとづくもので、災厄を除くものとされ、重陽の節句の日に行われる菊花の宴でも、御帳台の柱にかけられました。とくに御所では、この日から端午の節句まで、柱に茱萸囊を掛け、端午の節句から重陽の節句まで薬玉を掛けて天皇の健康を願うしきたりがありました。（*「九月九日に禍が起きるが、茱萸の枝を肘に巻いて高いところへ上り、そこで菊の酒を飲めば、難を逃れられる」「茱萸袋は家の柱に掛ける」「茱萸の枝を折って頭にさす」などの言い伝えがありました。）

【その二 菊の被せ綿】 重陽の節句の前日である八日の夜に菊の花に綿をかぶせ、翌朝、菊の露や香りを含んだ綿で身体を清めると長生きできるとされてきました。

【その三 菊酒】 重陽の節句の日には、菊を鑑賞しながら無病息災を願う「菊酒」をいただきました。菊酒とは、菊の花を浮かべた酒、菊の花びらを浸した水で仕込みをした酒、あるいは氷砂糖と一緒に焼酎に漬けたものでもありともいわれています。

【その四 菊湯と菊枕】 重陽の節句の日には、菊を湯船に浮かべた「菊湯」に入ったり、「菊枕」で眠ったりしました。重陽の節句の日には菊の花びらを天日干しにして、詰め物にして作った枕のことです。菊の香りには邪気を払う力があると信じられていました。

（参考）白井明大『暮らしの習わし十二か月』（飛鳥新社）



ユーカリリースをつくる小さな会

十月三十日の日曜日の午後、「ユーカリリースをつくる会」を開きました。神社で干したユーカリ葉の良い香りを共有したい、それだけの思いから企画しました。当日の会場には、長野県大鹿村、宮崎県日の影町、横浜市金沢八景、海老名、厚木、秦野、群馬県、北海道、鹿児島県、日本各地からやってきた様々な植物たちが一堂に会してにぎやかな空間になりました。

会場に一步入ると植物の天然の芳香で満たされました。植物は素材というだけでなく、そこにあるだけで空気を柔らかくしてくれます。身近によくある植物も、皆さんのリースの中ではそれぞれの小さな存在が美しく引き立っていました。



Message 自然のままの贅沢な材料が素敵で、とても楽しかったです！初めての体験でしたが、リースは思ったより難しく、勉強になりました。手作りのお茶菓子も大変美味しく、特に栗の渋皮煮はあと30個食べたいくらいでした(^▽^)/完成品は早速玄関に飾りました。おかげさまで家族や友人からも好評です！ (K・Uさん)

Message 可愛い植物がたくさんあって、どれを使おうかあれこれ迷うのも凄く楽しかったです。家に帰ってからもユーカリの香りに浸ってしまいました。今度は材料集めから参加したいです。

(池田敦子さん)



Eucalyptus wreath making workshop

October 30th
Starts from 2:00 pm
no reservation needed
fee 1000yen
tea and refreshments included

Make your own wreath using various fragrant dried plants.
Please come along.

YAYOI JINJA 2-13-13 Kokubukita, Ebina-shi



Message ユーカリリース！？私に作れるかしら、と少し不安に思いながら参加したワークショップでしたが、素敵な香りに包まれながら沢山ある花や木の実などの素材を組み合わせイメージしていると不安も消えていて、欲張って2つも作ってしまいました。しばらくはこのユーカリリースがうちの玄関の主役です。（金野詩暢さん）

Message ユーカリと聞くと、まずコアラの食べ物が浮かびます。殺菌作用があると知りアロマオイルを買ったことがありましたが、葉に触れるのは今回が初めてかもしれません。少し銀色がかかったユーカリの葉は雰囲気があり素敵で、種類によって形や香りが違うのにも惹かれました。あとで調べてみたら、何百種類もあるそうです。藤の蔓を土台にし、ユーカリの葉をメインにドライフラワーや木の実などを合わせてみましたが、なかなか思うような形になりません。小休憩して手作りお菓子をいただいていると、皆さんのリースが次々と完成していました。同じような素材でもデザインは様々で面白い。自然素材ならではの良さなのでしょう。迷いながらもやっと完成したリースは家の壁に飾ってあります。ユーカリの落ち着いた色合いが気に入っています。庭に咲いていたサルビアでまたリース作りを試してみたくなり、今ドライフラワーにしています。（荒谷美子さん）



気仙沼市本吉町小泉

八幡神社 例祭

平成二十八年九月十八日、宮城県気仙沼市本吉町小泉地区に鎮座する八幡神社（山内義夫宮司）の御例祭が斎行されました。



九月十八日、御社殿での神事を終えた後、白張姿の大人たちでかつぐ本神輿みこしの後を、中学生の大きな御神輿が続きます。御神輿は小雨が降る中、津波の被害で更地になってしまった跡を力強く練り歩き、中学校までの長い坂を登りきりました。午後、体育館では鼓笛隊の演奏が披露され、中学生はここで大活躍。そして御神輿のほうも幼稚園生、小学生の子供会による手作りみこしの神輿が合流。中学生神輿を担ぎ元気に小泉地区を練り歩きました。その後、中学校の卒業生も参加して掛け声をかけ合いながら、最後は神社までの階段も登りきり、御社殿前まで渡御しました。初めての神輿に戸惑っていた中学生も、川崎の稲毛神社氏子青年会OBの方の指導を受け、また宮司様、禰宜様の励まし、地元の方々の声援を受けながらしつかりと担ぎ、慣れるにつれ表情も生き生きとしていました。お神輿の片づけまで大人の動きを見習いながら自発的に手伝う中学生の姿がありました。

夕方からは地区の昔からの恒例行事という素人演芸会が開催されました。「震災前も今もこれからもずっとこの地域にとって八幡様はなくてはならない存在」であり、「大人のそのような気持ちが子供たちに伝わっているはず」という地元の方の言葉が印象的でした。

お年寄りから子供まで積極的にお祭りに参加する姿を見て、その熱意と暖かさに触れ、地域の方々が神社を支え神社が地域の人たちのつながりをより強くしているように感じました。



写真（左上）小泉小学校前を練り歩く子供神輿（左下）八幡神社前にて中学生神輿の還御（右）雨の中、小泉地区を練り歩く中学生神輿

宮城県気仙沼市本吉町小泉は、鮭の増殖業が盛んで、明治二十年頃には当時の小泉村の直営で行われており、昭和三十年以降、現在まで「小泉川鮭増殖組合」が運営管理を行い、宮城県沿岸の鮭漁に貢献している。東日本大震災による津波で鮭孵化場が壊滅的な被害を受けたが、震災後も毎年途切れることなく稚魚を小泉川（津谷川）に放している。

平成二十八年十一月、小泉川を遡上し、戻ってきた鮭を見せていただく機会に恵まれた。鮭は放流から約四年ほどで故郷の川に戻るそうだ。何年に放した鮭であるかは鱗の調査によってわかるという。例年よりまだ水温が高くこれから本格化する時期だろうか？

だが、捕獲施設の中にはたくさん鮭が泳いでいて圧倒された。以前は日に二、三百匹も遡上する日があったが、近年は減少している。鮭増殖組合の方によれば、川岸の工事で景観が変わるだけでなく、川の流れや匂いも変わったかもしれないという、「川の匂い」という言葉が心に残った。

を行い、御祈禱料として鮭をいただいていたそうだ。



八幡神社御例祭（平成28年）小泉川の川辺での神事

毎年、小泉地区に鎮座する八幡神社の御例祭では、小泉川の川辺で神事が行われる。川の水や鮭をお供えし、鮭の大漁を願って祝詞があげられ、玉串を奉る。宮司様の御祖父様の代には毎朝、川で大漁祈願

川で捕獲した鮭はすぐに鮭孵化場に運ばれ、メスの鮭の腹を裂き、採卵して水槽に入れる。そして、育った稚魚を再び小泉川に放す。鮭孵化場の敷地内には魚魂碑が立てられている。命をいただき、命をつなぐことへの慰霊と感謝の気持ちが入められている。見学と体験にきた小学生たちにも魚魂碑に手を合わせることを教えているという。毎年の御例祭での大漁祈願の際に、中学生が玉串を奉る姿が思い出される。地域の産業と自然とともに人々の祈りがあることを次世代の子供たちは学び、その思いが引き継がれていくのだろう。

田畑を潤し、鮭が戻る川。そして目前には稚魚が放たれ、育つ恵みの海が広がる。そこに住む生物や自然、人々の命の循環で地域の営みが成り立っていることをあらためて教えられた。



小泉川を遡上してきた鮭



小泉川の鮭捕獲施設

立冬から大寒 二十四節氣と日本の風習(四)

立冬 (新暦十一月七日〜十一月二十一日頃)

「冬の気立ち初めていよいよ冷ゆれば也」*

「十六団子の日」…農家では、春(三月十六日)に山から里へ下りた田の神様を十六個の団子でもてなし、十一月十六日に山へ帰る神様に豊作への感謝を込めて、十六個の団子をお供えします。

【旬の草花・野菜・魚介】水仙、茶の花、蓮根、ひらめ

小雪 (新暦十一月二十二日〜十二月六日頃)

「冷ゆるが故に雨も雪となりてくだるがゆへ也」*

「あえのこと」…田の神様に収穫を感謝し、豊作を祈る奥能登で行われる祭り。「饗(あえ)」はごちそう、「こと」は祭。神様をごちそうやお風呂でもてなす。

【旬の草花・野菜・魚介】野茨、やつで、ごぼう、春菊、かます

大雪 (新暦十二月七日〜十二月二十日頃)

「雪いよいよ降り重ねる折からなれば也」*

「羽子板市」…浅草の浅草寺で縁起物の羽子板市が立つ。

【旬の草花・野菜・魚介】藪椿、ねぎ、にら、鮭、ぶり、牡蠣



冬至 (新暦十二月二十一日〜一月四日頃)

「日南の限りを行て日の短きの至りなれば也」*

「初茜」あかね…初日の出の直前の茜空。夜の暗がりから、白み明るみやがて茜色に染まる空は日の出より先に元旦の訪れを告げます。

【旬の草花・野菜・魚介】千両、万両、百合根、南瓜、鯉

小寒 (新暦一月五日〜一月十九日頃)

「冬至より一陽起るがゆえに陰氣に逆らう故益々冷る也」*

◇寒さが極まるやや手前。「寒の入り」を迎え立春になる「寒の明け」までの約ひと月が「寒の内」。

「春の七草」…せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、なずな、すずしろ

【旬の草花・野菜・魚介】柊、蟠梅、大根、あんこう、鱈

大寒 (新暦一月二十日〜二月三日頃)

「冷ゆることの至りて甚だしきとなれば也」*

「春隣」…もうすぐそこまで春が来ているという意味。春の季語。

【旬の草花・野菜・魚介】福寿草、小松菜、赤貝、わかさぎ、めひかり

【参考】矢嶋文子『旬のやさしい歳時記』(平成二十六)主婦と生活社、白井名大『日本の七十二候を楽しむ―旧暦のある暮らし―』(平成二十五)東邦出版 *『暦便覧』より



大籠村のクリシタン



晩秋の十一月、岩手県一関市藤沢町大籠にある「大籠クリシタン殉教公園」を訪ねた。江戸時代ははじめここ大籠で三百余人の信徒が殉教した。

一説によると、永祿期（1558）頃、製鉄の技術とともに大籠にクリスト教が伝わったとされる。苦しい生活をしてきた農民が経済的豊かさや心の平安を求め、鉱夫として働きつつ信仰を深めた。この地に布教したという千松兄弟は布教と祈りの場を設けクルス像を安置したとされる。他方で、元和六（1620）年以降、禁教下のクリシタンが東北のあちこちの鉱山へと大勢流れこみ信仰が広まった。大籠も例外ではないという説も有力のようだ。江戸時代初期、当時の藩主伊達政宗は製鉄業の奨励とともにそれを担うクリシタンも保護した。しかし、政宗の没後さらにクリシタンへの迫害も激化し、大籠村においても厳重な宗門改めが行われた。デウス仏は地下に埋められ、十二の神と称し、さらには山神として祀られた。そしてついに寛永十六（1639）年と翌年以降、三百余人もの信徒が殉教した。打ち首、十字架での銃殺、さらし首まで行う悲惨な処刑だったという。

現在、大籠にはいくつかの刑場や首塚の跡が残っている。殉教公園の丘の麓には資料館があり、クリシタンが遺した品が展示されている。また丘に沿うように蛇行しながら登る道はクリストが十字架を担いで登った「ゴルゴタへの道を想像させる作りになっており、登り切ると、クリスト像を安置するクルス館がひっそりと建っている。そして振り向くと幻想のような眺めが広がった。建物と風景と空気が一体となった祈りの場。深い感動で心が震え、洗われる気がした。

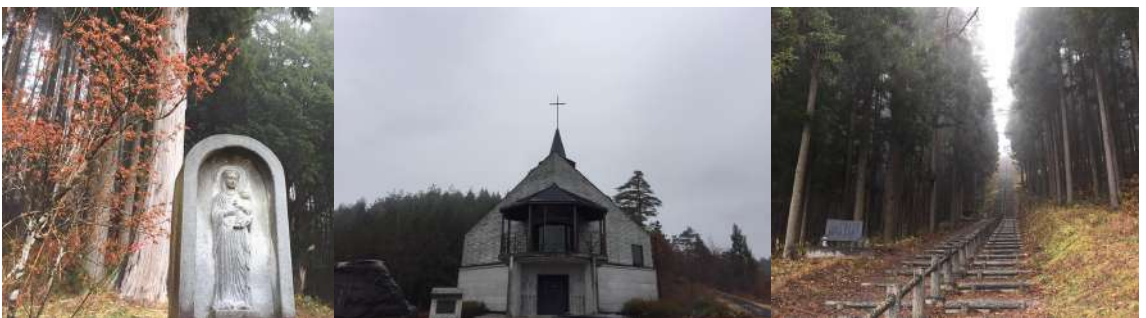
途中、遠藤周作や加賀乙彦らの言葉を刻んだ石碑があり、胸を打つ。「…緑の丘のここ大籠の地に立つと…、永遠の命を得た人々の霊が、この平安と美を現出させた気がして私は深い感動と安堵を覚えた（加賀乙彦）」。「直線の階段は三百九段。殉教した人の数になっている。季節ごとに、訪れるたびに違う風景を迎えられるのだろう。」

【参考】『大籠のクリシタンと製鉄』

藤沢町文化振興協会発行（平成十九年第三版）

カトリック中央協議会Web文書館 <http://>

www.cbj.catholic.jp





亀井久美子

河童をたずねて目久尻川を歩く。

伊勢下村橋より目久尻川下流を望む

新年おめでとございます。社報「弥生」は記念すべき第十号を迎えました。テーマは川。今号では弥生神社の最も近くを流れる目久尻川を散策してみます。

不思議な名前のその川は、座間市栗原の小池・芹沢辺りから流れ出て、海老名市・綾瀬市を経由して寒川町で相模川に合流する全長十九キロメートルほどの一級河川です。水源は豊富な湧水で、現在でも座間市民の飲料水や工業用水として活用されています。

気になる名前の由来の地と水源の一つだった座間市小池を訪ねてみました。

「めくじり」の名の由来は諸説あるようですが・・・

その一 白髪弁財天社

座間市栗原、小田急線相武台駅から東北東へ八百メートルほどの住宅街の中にお社があります。境内は綺麗にされており、社殿も近年造営されたようで、地元の方々の信仰の厚さがうかがえます。隣接する児童遊園は、かつて「小池」と呼ばれた池を埋め立てて造られました。昭和三年発行の『座間村地番反別入図』には、小字小池谷に池の所在が記されています。小池淵、小池窪、上小池辺りで水が湧いていましたが、（目久尻川の水源地です）関東大震災以後から湧出が減少し、昭和三十年代に付近の台地の開発が進んだこともあって、昭和四十年代後半に湧出は止まりました。

この小池の鎮守として弁財天が祀られています。（この白髪弁財天社には養蚕の守護神である白髪大明神も祀られています。養蚕が盛んだったことがうかがえます）

この小池の谷と西に位置する蟹ヶ沢の谷が交錯する地帯には、豊富な湧水を利用して水田が耕作されていました。その中には、寒川神社の神に供える稲を作る水田（御供田）があったと伝えられています。「寒川神社の御厨から流れ出ている川」↓「みくりや尻川」↓「めくじり川」と呼ばれるようになったというものです。

その2 カツパ

海老名市国分小字杉本を流れる目久尻川にいつのころからかカツパが住みつき、年月が経つにつれ仲間が



伊勢下村橋から上流を望む



白髪弁財天



伊勢下村橋

(通称かっぱ橋)



増えていきました。数が増えると困るのは食べ物で、空腹のカツパたちは村の畑の作物に手を付けるようになっていきました。次第に大胆に田畑を荒らすようになり、困った村人はカツパ退治に乗り出します。そして、次々とカツパたちを生け捕りにしていきます。最後まで抵抗した親分ですが、見せしめに目玉をくじり(えぐり)取られてしまったとき。「目玉をくじりとった」から目尻川という名になった説。

河童の伝説の地を歩いてみました。寒く乾燥した冬晴れの日には河童に会えそうもありません。しかし伊勢下村橋で河童を発見しました。温かそうな毛糸の帽子と真っ赤なセーターを着て、肩から可愛いポシェットを提げています。どれも綺麗で真新しい感じなので、きっと素敵なスタイリストさんがいらつしやるのでしょう。季節が変わるころ訪れてみたくなりました。

目尻川について調べ歩いてみると、実にたくさん湧き水と出会うことができました。古の人々の水が絶えることなく湧くよう願う祈る心に触れ、温かい気持ちになると同時に、雨が降ること・水が湧くこと・いつでも美味しい水が飲めること・田んぼにお米が稔ることに自分は感謝しているだろうかと自問。自然の恵みに感謝して、目尻川の探索をまだまだこっそり続けてまいります。

弁財天と龍神

相模原の大沼にすむ龍神が(相模原市南区東大沼には昭和四十年代まで大沼と呼ばれた沼がありました。)小池の水を守る女神、弁財天を恋慕うようになりました。龍神は空から雨を降らせては、大沼から小池を結ぶ水の道を作り、弁天に逢いに来ました。大雨が降るたびに大沼と小池の間に深堀という堀ができるのはそのためであったといわれていました。



【参考文献】

『座間市史6 民俗編』座間市
座間市文化財調査報告書第十九集『新版 座間の湧水』座間市教育委員会

『海老名むかしばなし 第五集』海老名市広報広聴課

(写真：筆者撮影)



R・レッドフォード [movie](#)

『リバーランズスルーイット』

「厳格な牧師をしてる父と息子たち。そして兄弟の確執…のような話。兄はたしか大学の先生になって、弟はやんちゃ。兄弟でフライフィッシングを父に教わったのだけれど、弟は職を転々として、釣りで生きていくというふうになったような。でもそれぞれの人生に川は、変わらず流れてる的なモチーフで描かれてたと思う。」K・iさん



[movie](#)

東陽一

『橋のない川』

「橋のない川、内容が社会的問題を扱うせいか地味ですし知られてない映画かも。実際私も、部落問題のことをほとんど知らない頃だったこともあり、実に非理論的というかくだらない、しょうもない差別的思考に凝り固まって、主人公兄弟を執拗にいじめ抜く富裕層の子への違和感が強く、自分はこうではなく、しなやかで柔軟性のある思考力を持ち続けたいよと思ったのを覚えています。人と異なり誰にでも清らかな川の映像が美しかったこと、南米民族音楽の音色のシンプルで印象的な響きも印象的でした。」K.junkoさん



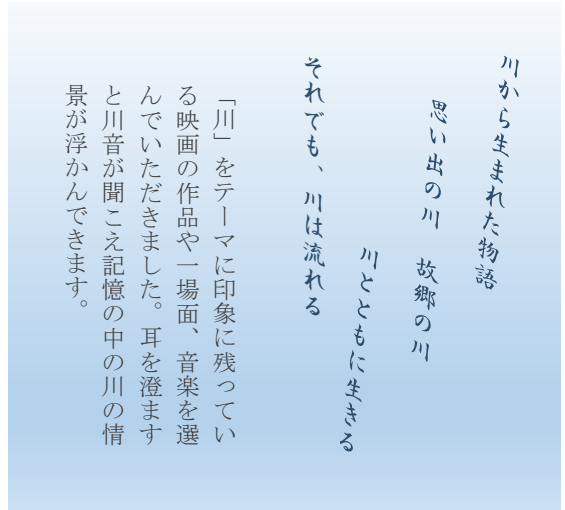
[music](#)

ショパン

「ピアノ協奏曲第一番」

「アルゲリッチ&アバド演奏版。オーケストラからはじまる力強い旋律、そして絶え間なく続くピアノの調べは、滔々と流れる川のような。特にアルゲリッチの演奏は、時に激しく、時に滑らかに、流れ行く川の様々な姿を、それを見る人の五感も含めて、情感豊かに描いていると思う。第一楽章途中でのアルゲリッチの暴走寸前の弾きっぷりがいい。ちなみに、ペットショップボーイズ「kings cross」はゆったりと夜の川の流れに乗っているような気分になる。」森岳人さん

—記憶のなかの音と像—川



川から生まれた物語

思い出の川 故郷の川

川とともに生きる

それでも、川は流れる

「川」をテーマに印象に残っている映画の作品や一場面、音楽を選んでいただきました。耳を澄ますと川音が聞こえ記憶の中の川の情景が浮かんできます。



[movie](#)

小泉徳宏

『ちはやふる』

「主人公ちはやちゃんの得意札『ちはやふる 神代も聞かず竜田川からくれないに水くくるとは』竜田川が紅葉で虹色に染め尽くされている感じが今の季節にぴったり。映画とアニメを見て、今まで興味がなかった百人一首がとても好きになった。」Acoさん



[movie](#)

W・ヘルツォーク

『フィツカラルド』

「アマゾン河から大きな船を人力で陸に上げ、さらに船を山越えさせる映画。悠久の流れに全く身を任せない映画。久しぶりに再び観たい。出来ればDVDではなくスクリーンで。」谷口明子さん



[music](#)

Amin

「大河流淌 小小恋情」
(大きな河と小さな恋)

「中国語の歌が美しく柔らかな雰囲気醸し出している。大きな川のほとり、純粋に響き渡る水の音。小さな存在であるふたりを歌う恋歌。」kusumiさん



谷山浩子

「河のほとりに」

「くずっと昔から知っていたような」のフレーズそのままの郷愁を誘うメロディ、透明な声。河のほとりに坐っているようなこころもちに。」

windy さん

music



ヨハン・シュトラウス2世

「美しく青きドナウ」

「ヨーロッパの東西を流れる大河。私が実際に見て感じたのは悠然として、川沿いにお城とか教会があって…古い建物ばかりのヨーロッパで、川も変わらずに流れ続けてきたんだなあ、と。ウィーンフィルのニューイヤーコンサートの定番曲で、イントロ聞いただけで涙が出そうになる。」陽山さん

music

そのほか、

音楽では、ラヴェル「水の戯れ」、スメタナ『モルダウ』（連作交響詩「わが祖国」第2曲）、ブルグミュラー「清い流れ」、かぐや姫「神田川」、童謡では「春の小川」「隅田川」、映画では『岸辺のアルバム』など…あげていただきました。



「水の戯れ」



「神田川」



『岸辺のアルバム』

～10本の映画の川～ 谷口悌三



『長江哀歌』



『家宝』



『アフリカの女王』

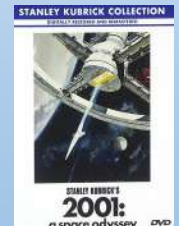
「記憶に新しいのは『ハドソン川の奇跡』（クリント・イーストウッド／2016）で、川の水面＝スクリーンにめりこんだ飛行機の姿。川に沿って上り下りするといえば『家宝』（マノエル・ド・オリヴェイラ／2002）、描かれている監督が愛するポルトガルのドウロ川の情景に息を呑む。大河といえば『長江哀歌』（ジャ・ジャンクー / 2006）で、川辺にたたずむ男女の間に流れる悠久の時間。愛する男女の川下りといえば『アフリカの女王』（ジョン・ヒューストン／1951）で、東アフリカの急流でキャサリン・ヘプバーンが帽子を飛ばすシーンは必見。子どもの川下りといえば『狩人の夜』（チャールズ・ロートン／1955）の小舟の逃走に背筋が凍る。川を渡って逃げるといえば『赤線玉の井 ぬけられます』（神代辰巳／1974）で、追い詰められた娼婦が色街を隔てる川（堀）に飛び込むシーンは痛快。川べりの騒ぎといえば『黒猫・白猫』（エミール・クストリツァ／1998）のジプシー（ロマ族）のボート小屋のドタバタは傑作！それはドナウ川だけど、『2001年宇宙の旅』（スタンリー・キューブリック／1968）で使われた「美しく青きドナウ」（作曲：ヨハン・シュトラウス2世）は衝撃的だった。歌では、『帰らざる河』（オットー・プレミンジャー／1954）のテーマ曲を歌うマリリン・モンローの艶っぽい声が好きだけど、有名なのは『ティファニーで朝食を』（ブレイク・エドワーズ／1961）の「ムーン・リバー」（作曲：ヘンリー・マンシーニ）でしょうね。映画史的には、<橋で描かれる川>の方が多くかと思いますが、それは省略しました。」（映像作家）



『黒猫・白猫』



『帰らざる河』



『2001年宇宙の旅』

古今のうた 川

世の中はなにか常なるあすか川昨日の淵ぞ
今日は瀬になる

読人知らず

「この世の中では、何がつねに変わらずにあるのだろうか（いや、ない）。（明日という名の）飛鳥川において、昨日は淵であったところが、今日は瀬に変わっているように。」

世の中はつねに動いていて、同じ状態が続くことはないのだという無常感を表現した歌。飛鳥川（明日香川）の「あす」を「明日」に掛けて、後の「昨日」「今日」と縁語となる。

『古今和歌集』にはこの歌と同じく雑歌に飛鳥川の歌がある。

「あすか川淵にもあらぬ我が宿もせに変わりいく物にぞ有りける」。また、恋歌に次のような読人知らずの歌がある。「ふちはせになる世なりとも思ひそめてん人は忘れじ」と、川のように無常である世にあつても思いそめた人のことは忘れまいという心の不変をうたつており胸を打つ。『万葉集』にも飛鳥川を詠んだ歌は多数あり、『枕草子』では「河は飛鳥川、淵瀬も定めなく、いかならむと、あはれなり」と記されている。*飛鳥川：飛鳥文化が花開いた明日香村の山間を源とし、村の中央部を南北に貫流したのち、橿原市の中心市街地を北流しながら、奈良盆地の中央部で大和川に合流する全長二十四キロメートルの一級河川。

【参考】佐伯梅友 校注『古今和歌集』（昭和五十八）岩波書店 奈良県公式ホームページより

わたつみの海に近づく石狩川かざり無き浪たちわたる

斎藤茂吉『石泉』（昭和七）

われ在りと思ふはさむき橋桁に濁流の音うちあたるたび

寺山修二『田園に死す』（昭和四十）

常ありし大河不変の黄濁をひとり思えりアジアの色かと

大家増三『アジアの砂』（昭和四十六）

人の名を忘れ川の名を忘れざる 夏野を貫きて遠く光れり

斎藤 史『涉りかゆかむ』（昭和六十）

いとしさもざんぶと捨てて冬ふの川数珠つながりの怒りも捨てる

辰巳康子『紅い花』（昭和六十四）

白鳥を浮かべしは去年月こぞの斑ふを浴びてぜんしんを凍らす運河

佐佐木幸綱『旅人』（平成九）

長江に沈まむとする村の名を口に浮かぶる壬午おほつごもり

高崎淳子『朧光亭日乗』（平成十八）

（一首め）わたつみ（海神・綿津見）：日本神話の海の神／石狩川：北海道中西部を流れ日本海へ注ぐ。（七首め）長江：中国青海省チベット高原を水源地域とし中国大陸の華中地域を流れ東シナ海へと注ぐ。／壬午（じんご、みずのえうま）：干支の一つ。十干は壬、十二支は午。第十九番目の組み合わせ。

本を読む。

小河洋友 (図書館司書)

「川」を考える本 「川」をキーワードに五冊を選んでみました。人の生活に密着し、文明をはぐくむ川。身近から環境を考える際、重要な出発点になるでしょう。

環境を知るとはどのようなことか

養老孟司 岸由二 [著]

PHP研究所 2009.9



東京地形散歩

内正浩 [著]

宝島社 2016.10

身近な河川跡を新発見する小さな旅に出よう！
3D地図のわかりやすいデジタルをメインに、東京の地形の成り立ち、歴史をひもといていきます。渋谷、新宿、六本木、外濠、等々力溪谷など各地の水系を巡る散歩ルートを二十以上紹介しています。



川はどうしてできるのか

藤岡換太郎 [著]

講談社 2014.10

最初は同じ雨水なのにその姿は千差万別で、時に人間には信じられない振る舞いを見せる川。砂漠でいきなり洪水を起こす川、平地より高く流れる川、黄河やメコン川の不思議な流路・・・まるで魔術のような現象はなぜ起きるのか、川の謎に迫ります。



川の文化

北見俊夫 [著]

講談社 2013.8

豊かな「川の国」でもある日本。かつて民俗学者の柳田國男は「川は、日本の天然のもつとも日本的なるものであった。」と述べたとのこと。舟運の歴史と、川船の種類、渡しと橋、年中行事と信仰など・・・豊富な事例で川の文化の豊かさが語られています。



川の旅

池内紀 [著]

青土社 2002.6

ドイツ文学者である著者が川と人の暮らしを描く川の国漫遊記です。同じひとつの川でも上・中・下流によって、川と人の関わり方が違っており、まるで別個の川といった場合が正確な場合もあるとのこと。北海道・十勝川から奄美大島・河内川まで三十六編を収録。



川の思い出ふたつ

谷口明子（陶芸家）

【思い出 1】東南アジアのメコン川

アジアの旅をしたとき、この川何度かを下ったことがある気がするが、最も印象に残っているのは、ラオスでタイ国境のフェイサイという町からルアンパバーンという町まで移動した船旅である。船は2種類あった。①安いが2日かかる大きなスロートボート②やや高いが5時間で移動できる小さなスピードボート。私はこのとき後者を選んだ。

このスピードボートがどんな船かという点、ただの六人乗りの木のボートにエンジンをつけただけのものであり、これで時速八十キロ出して川をぶっ飛ばす。乗客はヘルメットと救命胴衣を着用させられて木の座席にじっとうづくまる。一番前に座った人はずつと水しぶきと風を受け続ける。最初は風切るスピード感にテンションが上がるが、最後のほうは寒さと固い木の席に座

り続けた尻の痛さに無言で耐える感じになる。また、途中買い物帰りかなにかの地元民が荷物を持って乗り込んできたりして、定員六人なのに一時的に八人乗っていた区間があったりもした。思い出すほど命知らずな乗り物であった。無事でよかった……。

【思い出 2】地元の目黒川

現在は桜の季節には花見客で賑わうまでになったが、私が子供のころは最悪だった。山手線で目黒川の上を通過すると、車内にも悪臭が入ってきた。不法に投げ込まれた自転車が水面から半分飛び出し、かなり長いこと放置されていた。子供心に（いつまであのままなのだろう）と思ったのを覚えている。よどみきっていて流れずら感じない川だった。あまりにひどかったからか、蓋をされていた時期さえあった気がする。

今はある程度浄化され、自転車のような粗大なものが投棄・放置されることもなく、川べりも緑を設えて整えられ、付近のタワーマンション族の子供連れが散歩を楽しんでいたりする。風景の殺伐は薄まり、



川魚…？（スペイン）



川の釣り人（ポルトガル）

悪臭もおさまった。しかし、殺伐や悪臭そのものは真綿に何重にもくるまれないながら、そこはかとない気配を発し続けている。白い真綿の中で熟成され続けている。

新しい年だ。無限に流れ来、流れゆくものの中から、私は、今年は、何をどう受け止めることにしようか。そして、何をこっそり流すことにしようか。

（写真：筆者撮影）



ペルー北部海岸地方、ポマの森を東西に走るレチェ川（Rio La Leche）。レチェはスペイン語で牛乳という意味。写真を撮った昨年8月は乾季の最中だったので水気は全くないが、雨季とエルニーニョが重なるとここにも滔々とした川が現れる。右側奥に写っている山のようなものは日干しレンガを積んで築かれた「ワカ」と呼ばれる遺跡の一つ。（工藤福太郎）



弥生神社では、『大祓詞』書写会を行っています。境内の掲示板やご希望の方には御葉書で、オンラインでは弥生神社のTwitter、Facebookでご案内しております。

授与品紹介

札所でお分けしている授与品です。弥生神社のオリジナルです。

「破魔矢」几帳結び・菊結び・叶結びを紅白の江戸打紐でひとしずく結んで、破魔矢に飾りました。



縁起物の熊手です。水引で松・梅を結び、稲穂、麦穂、千代紙、麻、そして繭玉の酉で飾りました。手作りなので一つずつ表情が違います。



羽ばたく鳥と桜咲く「合格守り」。純白・明黄・浅黄の三種類です。



社務猫のご挨拶

あけましておめでとうございます。お正月は寝正月。押し入れの中の宮司の布団の間にはさまっています。今年もよろしくお願います。



きーこ

あけましておめでとうございます。元旦の朝には、オカカをたっぷりこはんにかけていただくわ。新年もぼちぼちと社務猫生活を…よろしくお願います。



ちよろ

編集後記

あけましておめでとうございませう。第十号になりました。手探りで始めた第一号より早くも一年が経ちました。皆様の協力や励ましに感謝申し上げます◆今号のテーマは川。様々に語られるいづれも川のイメージに清々しさを感じていただければ幸いです◆数年前に観た映画『阿賀に生きる』（佐藤真監督）を思い出します。新潟県阿賀野川沿いに暮らす人々の日常をたどるドキュメンタリー。重層低音のように流れる川とともに力強くおらかに流れ動く人々の身体と生活。そんな流れの中での農作業や船大工の仕事、神事、食事、会話に、しつかりと積み重なっていく日々の時間、人同士の関係の深まり、蓄積され伝わっていく技術や祈りがあることを感じます。そして日常の世間話とともに語られる水俣病の痛み。川は文化や信仰、社会の構図をも映し出し、自然と人間、命のつながりを浮き彫りにします。人は時々そのような流れや循環を分断したり滞らせてきました◆変わりゆく世界、流れゆくそれぞれの人々の人生の中で変わらぬに神様をお祀りする神社があり、皆さまとご縁が結ばれる場であるように、今年も地道に進んで参るつもりです。本年もよろしくお願ひ申し上げます。



Facebook



Twitter

編集・発行 弥生神社

海老名市国分北一・一三三三三

(表紙写真：金目川と富士山。撮影：亀井久美子)